
宝玉列伝 ～琳悠国史～

深山 雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝玉列伝 ～琳悠国史～

【Nコード】

N0358Z

【作者名】

深山 雅

【あらすじ】

この世界とは異なる異世界。そこは2つの大国と6つの小国から成る大陸が4つと、5つの島で成る「塔」とよばれる機関で成り立つ世界である。

この世界では国はそれぞれ1つずつ宝玉を持ち、その所有者が「王」となる。代々続く王家を持つ専制君主制国家もあれば、議会や民で所有することで民主制、共和制をとる国もあった。

これは、南の大陸「赤大陸」にある大国の1つ「琳悠国」での、ある人物の伝記である。

1 ある女性の苦しみ（前書き）

筆者の文章力が拙いので伝わりにくいかもしれませんが、時々流血・残酷表現が入りますので気をつけてください。

1 ある女性の苦しみ

「うつ……く……はあ……」

薄暗い部屋の中で、苦しげな女性の声が響く。

広々とした無機質な室内には、寝台に横たわる妙齡の女性の他に人はいない。

豪華な寝台に横たわり、上等な絹の寝巻きを纏い、冴え渡る美貌を持った妙齡の女性である。

女性は額に脂汗を浮かべ、苦悶の表情で痛みに耐えていた。

「どうして、私が……こんな……」

彼女ははちきれんばかりに膨らんだお腹を憎々しげに睨んだ。

「どうして……こんな子を産まねばならないの……？」

それが己の苦痛に繋がることを理解しながらも、彼女は力の籠らない拳で己の腹を殴りつける。否、腹ではなく、胎の子をと言っべきか。

「くう……！」

弱々しい刺激ではあったが、彼女の陣痛を悪化させる効果はあったらしい。それでもその手は止まらない。

「なんで……どうしてよお……！！！」

1 ある女性の苦しみ（後書き）

初めての小説投稿です。

ちゃんと続けられるかは不安ですが、読んで下さるとありがたいです。

2 地獄の始まり

彼女の名は美珊^{みさん}。赤紫地方の大国であるここ、琳悠国王の第6夫人である。

とはいえ、その地位や名誉を美珊が喜んだことは、ただの一度も無い。

彼女には既に幸せな家庭があったのだ。優しい夫と可愛い息子。決して豊かではなかったし、生活も苦しかったが、溢れんばかりの愛情に包まれていた。

美珊と夫は共に旅芸人の一座に属し、自然と・・・いつの間にか愛し合うようになっていた。踊り子であった美珊と、笛吹きの方。3つの息子も父親の真似をしてか笛を吹くようになり・・・ありふれた、けれど幸せな日々。

その崩壊は・・・呆気なく訪れた。

そもそもは、いつも通りの興行だった。街で芸を披露していたのがたまたま役人の目に留まり、一座は王宮に招かれた。

夜の宴の余興として、王に見せ・・・褒めの言葉まで頂いた。皆、光栄と感激に打ち震えたものだ。

王が、美珊を夜伽に所望するまでは。王は美珊を見初めてしまったのだ。

確かに、彼女は美しく魅力的な女性であった。しかし既に夫も子もいる身。いくら王とはいえ、流石にそれは人道に悖ると、拒絶した・・・そして、その時から地獄は始まった。

用意された部屋に一座共々戻った直後、王の使者だという男より金子を賜った。彼らは興行の代金だろうと、何の疑問も持たずに受け取ってしまう。

そのほんの数分後の事であった。

王の私兵が部屋に踏み込み、盗人を捕らえると言い出したのは。捕まったのは・・・美珊の夫だった。

それは賜ったものだ、盗んでなどいない・・・そう訴えても、信じては貰えなかった。否、始めから聞く気など無かったのだ。

何故なら、それこそが王の手であったから。始めから、美珊の夫に罪を擦り付けて彼女を手に入れるつもりだったのだろう。夫の無実を訴える彼女に自分のモノとなれと言いつつ放ったのがいい証拠だ。そうでなければ、夫に死罪を言いつける、と。

それによくよく思い出してみれば、あの使者はその金子を美珊の夫に押し付けていった。一座の長が受け取ろうとしても、頑として譲らなかつた。あの時点で気付けば良かったと後悔しても、もう遅い。

美珊は、諦めた。

相手は一国、それも赤紫大国の長であり、本当にそれだけの権力を持っている。

どうせ王は、幾人もの美女を後宮で囲っている。少し毛色の違う女が物珍しいだけだろう、ほんの数時間の我慢だ、彼の命には代えられない・・・。

地獄の一夜であった。けれど、夫のため、今だけの辛抱だと思えばこそ、耐えた。

まさか、『地獄の一夜』が『地獄の始まり』だったなどと、夢にも思わず。

王は美珊を本格的に気に入り、傍に留め置くことにしてしまった。そのため翌日、彼女の夫の首を落とした。

彼女の目の前で、窃盗の咎だと言って。

耳を劈くような断末魔の悲鳴、転がる生首、見開いた目、吹き出す鮮血、ゆっくりと傾いでいく軀。今でも彼女の脳裏に焼きついている。

彼女の夫を殺すことは、ある意味では人質を失うということだ。それでも王がそれを行ったのは、他にも人質になり得る存在があったからだ。彼女たちの息子が。

あえて彼女の目の前で夫を殺し、言うことを聞かねば子供も同じ

目に合わせると脅したのだ。まだ、たつた3才の幼子の首を、落とすと言つ。

美珊に逃げ道は無かった。

2 地獄の始まり（後書き）

まだまだ序章です。

3 望まぬ生活

息子は地下牢へ、美珊は後宮へとそれぞれ留め置かれた。

美珊にとって唯一救いだったのは、一座の皆が早々に解放されたことだろう。美珊やその息子に申し訳無さそうではあったが、彼女にしてみれば一座の者たちも大事な『家族』。無事を喜びこそすれ、恨むなどということは無かった。

息子がいるのは地下牢とはいえ、十分な食事も世話も与えられていると言われた。正直半信半疑ではあったが、仮にも人質なのだ。まさかそこまで無体な扱いは受けていないだろうと思った・・・思うしかなかった。下手に口出しして逆鱗に触れば、目も当てられない。

そうして彼女は来暦2108年、琳悠国朱王朝第31代国主・朱班保はんほの側室、第6夫人となったのである。現在より2年前のことだ。嫁いでまず知ったのが、王が恐ろしいほどに無能な王だということだった。

長い歴史と大国ゆえの地力の上に胡坐を掻き、当人は遊興に浸り、興味を持つのは専ら酒宴や女ばかり。

これまで美珊たち一般の民が王が行っていると思っていた政は、全てその王妃のものだったのである。

無能な王と比べ、王妃は賢明な人であった。事実上の施政者は王妃であるのに、布令は王の名で出されていたのだ。政治のことなど美珊にはよく解らなかったが、少なくとも王のこの状態には、呆れて何も言えなかった。

そしてその美珊の生活は、世の女性がどれほど憧れようと到底叶えられないものではあっただろう。

豪華な後宮の一角に与えられた広々とした寝室、数を数えきれないほどの装飾品、色とりどりの絹の着物、食べきれないほどのご馳走、山海の珍味、傳く女官。

しかし美珊にしてみれば、そのどれもが吐き気がするほどの嫌悪感を齎すものでしかなかった。

装飾品も、絹も、何のためのものか。着飾って、あの憎い王を喜ばせるためのものではないか。

広い寝室は、何のためのものか。あの憎い王に抱かれる場所ではないではないか。

どんなに美味なものを食べようと、味がしないではないか。息子の安否も解らぬのに、こんな食事が喉を通るものか。

頭を下げ、平伏する女官達が内心で何を考えているのか、彼女は知っている。

実は彼女には、生まれつき魔力があった。とはいえ、魔法使いではない。『塔』で公式登録されていないし、正式に学んだことも無い。才能は充分なのにコントロールが上手く出来ていないせいか、時折周囲の人間の思念が流れ込んでくるのだ。

『所詮は下賤な旅芸人の出。』

『あの顔と体で王に取り入った。』

『薄汚い女だこと。』

王は己の体裁のために、周囲にはこう触れ回っていた。

旅芸人をしていた美女がどうしても希い夫を捨ててまで来たので、仕方が無く迎え入れてやったのだ、と。

嘘八百に過ぎないし、真実に気付いている者もいたろうが、そんなことに意味はない。

王と、後ろ盾の無い末席の側室。真実がどうであれ、どちらの言い分が事実としてまかり通るのかなど、火を見るより明らかだ。

それでも、彼女は我慢した。歯を食いしばり、拳を握り締め、寝台を涙で濡らしながらも、黙って従い続けた。いつの日か、王が自分に飽きることを願って。これまでも、そうだった娘たちがいたと、噂で聞いていた。無理矢理娶られたが飽きられ、多少の感謝料を貰って離縁された娘たちが居たことを。

その時を待ち、息子を連れてここを出よう、と。

耐えて、耐えて、耐え続けた。

そして彼女の思惑通り、1年ほどで王は美珊に飽いた。

彼女は後宮のどの女性よりも美しく魅力的ではあったが、王としては、閨で笑うことも口先だけでも愛を囁くこともしない女よりも、そうした奉仕をしてくれる女の方が良かったのだ。

しかし・・・ようやく逃れられると思ったのも束の間、美珊は永久にこの後宮に留め置かれることを言い渡されてしまう。

それは、彼女が王の子を身籠ったからであった。

4 仇の子

その身に子を宿すのは、初めてのことではない。けれど、こんなにも違うものか、と愕然とした。

前は、ただただ幸せだった。子供のためなら、己の命も惜しくは無いと思った。

けれど、今回はどうだ。

胎内に息づくのは、確かに我が子だ。けれど同時に、憎い男の血を引く子だ。それに、この子を身籠ったがために自由になる機会を失ったのだ。

既に王は美珊に飽きてはいたが、積極的に疎んでいるわけでもなかった。しかも、一応は正式な側室だ。その懐妊は国の大事。離縁の話は立ち消えになってしまった。

感じ方は人それぞれであろう。けれど。

けれど美珊は、胎の子を愛しいなどとは到底思えなかった。

こんな子は知らない、私の子は捕らえられた子だけだ。その思いで一杯だった。

日毎に大きくなるお腹は、地獄の象徴だった。

次第にはつきりと感じ取れるようになる胎動が、忌々しくて仕方が無かった。

子供には何の罪も無いなどと、そんなものは奇麗事に過ぎない。今存在していること、それそのものが何よりの罪悪ではないのか。

これは寄生虫だ。美珊の自由を奪い、養分を吸い取る寄生虫。

そして今、その子は産まれようとしている。

早く生まれて欲しい、とも、産まれてきて欲しくない、とも思う。さつさと胎からいなくなつて欲しかった。この身から切り離れたかった。

けれど、この子を産むということは、この子の、あの王の子の母になるということでもあった。

ああ、そうだったそ。

(死産であればいいのに。)

そうだ、それが1番良い。

王の子を産んだとて、当の子がいなければ、その母に用など無かる。晴れて自由だ。

「うっ！うっううう~~~~！！！」

美珊の呻き声が一際大きくなった。陣痛の間隔が短くなったのだ。経産婦である美珊には、直感で解った。

もつじき、産まれるのだ、と。

手を伸ばし枕元に吊り下げられた紐を引くと、大きな鈴の音が響いた。その数瞬後のは、数人の女性が部屋に入ってくる。彼女らは美珊に付けられた産婆であった。既に1度出産を経験しているから大丈夫、ギリギリまでは1人にしておいて欲しい、その方が気が楽だ・・・そう言つて、外に控えてもらつたのだ。

「子宮口は開いておりますね。では、いきんで下さい。」

事務的な口調であったが、下手に親身になられるよりはその方が良かった。無駄なことを考えずに済む。

「くっ・・・・・・・・！！！」

目も霞むような激痛の中、美珊は本能に従つて、強くいきんだ。

少しずつ、少しずつ、何か落ちてくるのが解った。何か、とは言つても、そんなのは胎の子でしかないのだけど。

どれほど、いきみ続けたらだろうか。

「ハッ、ハッ、ハッ・・・う・・・あああああ！！！」

一際大きな声を上げた瞬間、急に下腹部が軽くなる感じがした。

おぎゃあ、おぎゃあ、と火のついたような大きな産声が上がつたのが聞こえた。

美珊の期待に反し、子はそれはそれは元気なものだった。それを悟つた瞬間の彼女の落胆を、どう表現すればいいのか。

そして。

「おめでとうございませす。健やかな王子様にございませす。」

落胆は、絶望に変わった。

子供の性別は、敢えて考えないようにしていた。それだけでも恐ろしかったからだ。それでももう、この現実から逃れる術が考え付かない。

ああ、自分は王位継承権を持つ王子を産んでしまったのだ。

4 仇の子（後書き）

今回、美珊の心情を長々と書いていますが、これはあくまでも彼女個人の思いです。

現実では、父親が憎くても子供は思いやるといふ母も多いことと
思いますし、乱暴で出来たからとて子供に責任は無いでしょう。

ただ、美珊はそのようには思えなかった、そういうことです。
この話はあくまでもフィクションです。

5 『母』の姿

絶望は時に、人を狂気に導く。

現国王・班保には既に、8男11女があり、美珊が産んだのは第9王子である。現在ここ琳悠国では、女性及び女系王族の王位継承は認められていない。美珊の産んだ王子の王位継承順位は、二桁になる。つまりは、王位を継ぐことなどほぼ有り得ないのだが、それでも有していることには違いない。

「お待ちを。ただ今お知らせして参りますので。」
産湯を終えた赤子を寝台に横たわる美珊の隣に寝かせ、産婆たちは静々を出て行った。残されたのは、一組の母子だけ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
感情の窺えない能面のような無表情で、彼女は自分の産んだ息子を見遣った。

まだ産まれたばかりなだけあって、猿のような顔をしている。それでも曲がりなりにも母である美珊には、その子がどのような面立ちなのか判った。

憎い王よりもむしろ、美珊自身に似ているだろう。
まだ薄い毛髪の色は黒。すっきりと整った目鼻立ちだろう。まだ目は開いていないため、瞳の色は判らない。美珊に似たなら髪と同じ黒、王に似たならば血のような紅だろうか。

それは明らかに彼女の血を引く子で。
けれど憎い男の子でもある。

「嫌・・・・・・・・」
ポツリと、声が零れた。

「嫌・・・・何で・・・・こんな・・・・」
すやすやと平和そうに眠る赤子が、おぞましかった。

「嫌・・・・・・・・いやああ!!」

これ以上見たくなかったのか、ただの八つ当たりだったのか、或いは・・・いつそ死んで欲しかったのか。

実際のところはどんな衝動だったのか、それは美珊自身にも判然としなかった。

とにかく結果として、彼女は赤子を思い切り払い除けた。抵抗の術など持たない赤子はそのまま寝台から転がり落ちてしまう。

無駄に豪華でふかふかとしていた絨毯のお陰か、寝台がそれほど高くなかったからか、赤子は運良く死ななかった。これぞまさしく強運というものだ。いくら好条件が重なっていたとはいえ、まだ首も据わっていない嬰兒なのだ、死んでいてもおかしくない衝撃だっただろう。

当然のことだが、眠っていた赤子はまたも火が点いたように泣き出した。けれどその泣き声は、誰の耳にも届かない。そう、すぐそばに居る実母にすらも。

「いや・・・もういや・・・」

おぎゃあ、おぎゃあという泣き声の傍、彼女はぶつぶつと呟き続けた。

「もう・・・いや・・・こんなところ・・・」

呟き続ける彼女の目は、どこか焦点が合っていない。

「そうよ・・・なんでこんな我慢をしなきゃならないのよ・・・」

それは、息子を人質に取られているからだ、と彼女は頭の中で自答する。

「でも・・・どこにいるかは判ってる・・・そうよ・・・わかってるのよ・・・」

地下牢だ、そこに息子はいる。

「行かなきゃ・・・あの子・・・きつと、泣いてる・・・そうよ・・・私があの子を助けなきゃ・・・」

よろよると、痺れたように上手く動かない足を叱咤しながら美珊は寝台を抜け出した。

そうだ、2年を過ごした後宮だ、建物の構造は判っている、地下

牢の位置もわかる。いざとなったら、自分には魔力もあるのだ、きっと何とかなる。もう己の行動を制限していた胎の寄生虫は出て行った、動こうと思えば動ける。

「行かなきゃ・・・私が・・・すぐ、行くからね・・・お母さん、行くから・・・」

魔力があるうと、産後すぐの体の女1人と幼児が王宮から逃げ出せるはずが無い、とか。

運良く出られたとしても、すぐに追っ手を差し向けられる、とか。下手をすれば、今度は一座の皆が探し出されて人質にされたり、最悪見せしめに殺されたりするかもしれない、とか。

そんな懸念は、もう美珊の頭の中には浮かばなかった。あるのはただ、ここから出たい、息子に会いたい、それだけだ。

捕らわれの我が子を案じ、助けたいと思い、満足に動かぬ体に鞭打つ姿は、まさしく母のそれであった。

けれど、わき目も振らず部屋を後にする彼女の目には、今まさに助けを求めているもう1人の『我が子』は映っていなかった。

5 『母』の姿（後書き）

なんとも、暗いと言うか、重いと言うか、病んでいる展開ですね。
。。。

違うんですよ、本編はもう少しほのぼのというか、まっすぐというか。ただそうなたら多分もう、美珊のことをじっくり書く機会が無くなると思って……。

でも、ここまで突っ走るとは。書いた本人も驚きです。

それほどでもない、と思われるなら、それは筆者の文章力不足です。美珊、かなりヤバイ状態です。

美珊はこの話の主人公では無いので、今の内に書いておこうかと。ちなみに今は物語上、まだ序章です。かなり壮大な話になっちゃってます。どこまで書き続けられるかはわかりませんが、頑張ります。

次回は、この狂いつぶりに加え、ちょっと（かなり？）グロい表現が入る予定ですので、苦手な人は気を付けて下さい。美珊も、完全に発狂します。ネタバレになります。ここまですらでも充分不快に感じる人はいると思いますので、先に注意を。

感想いただけると嬉しいです。

6 黒曜の乱心

その夜、琳悠国首都・支城の王宮にある騒動が起こった。

地下牢は王宮の一角にある。元より滅多に人は来ない場所にある上に、時刻は深夜。美珊は運良く、日と目に付かずそこまで辿り着くことが出来た。

否、それは果たして、本当に運が良かったのだろうか。もしも道中で誰かに行くわして部屋に連れ戻されていれば、まだ幸せだったのかもしれない。待っているのはこれまでと同じ地獄の日々ではあっただろうが・・・あのような『モノ』は見ずに済んだはずだ。

地下牢には、誰もいなかった。彼女はそれにほくそ笑んだが、よく考えればそんなのはおかしい。牢屋というのは、生物を閉じ込めるための場所だ。しかし、望んで檻の中に留まるうなんて物好きはそうそういない。たとえそこにいるのが無力な5歳児であっても、監視の1人ぐらいいなければならないのに。

まともに思考が働いていれば、美珊とてその程度のことは解ったはずだ。けれどこの時、彼女の頭の中にはただ1つ、息子に逢いたい、それだけだった。

当然、鼻を突く匂いにも、気付かない。

牢は6畳ほどの広さで一房、それが狭い通路の両側に10ずつ並んでいる。1つずつ中を覗きながら奥へ奥へと進んで行き、美珊が息子を見つけたのは左手1番奥の牢だった。

「明恭……」

暗い地下牢の冷たい床に横たわる小さな軀。

当然錠は掛かっていたが、美珊が手を翳すと、独りでに開いた。習ったことなどないはずの魔法が、何故か使えた。

するりと入り込み、美珊は息子の元に歩み寄り、手を伸ばし……

「明恭……めい、きょう……?」

そこでやっと、おかしいと気付いた。
何故、息子はこちらを見ない。動かない。

「明恭・・・!?」

慌てて駆け寄り身を起こさせたその瞬間、美珊の全てが静止した。息子の軀は、恐ろしく軽かった。2年前、3歳のころよりも軽いかもしれない。

そしてその顔は、かつての面影など無いものだった。

夫と同じ茶色いビー球のような瞳があったはずの眼窩は、空洞だった。ぽっかりと空いた穴は虚ろに宙を向くばかりで、もう何も映していない。

健康的に張っていた浅黒い肌は、ぐにやぐにやに萎びて紫色になっていた。美珊が触れた箇所が、もぞりと蠢いたので恐る恐る視線を移すと、そこは皮膚が破け、腐った肉が覗いていた。動いたのは息子ではなく、息子の軀に巢食う蛆だ。

それを理解して思わず手でその蛆を払い除けようとした瞬間、腕が千切れ飛んだ。美珊のには無い、息子のだ。彼女が軽く払った息子の右腕は、その僅かな力にも耐えられずに肘の関節から取れてしまったのだ。

そうしてやっと、美珊は充満する臭気を嗅ぎ取った。それは死臭であり、腐臭であった。

腐乱死体。

その単語が、やっと頭の中に浮かんだ。

「嫌あああああああああああああああああああああああ！」

!!!!!!!!!!!!!!

美珊の絶叫と共に、凄まじい力の奔流が迸った。

美珊はあずかり知らないことであるが、王は美珊に飽きた時点で彼女の息子を見捨てていた。

美珊が欲しかったからこそ息子を捕らえ、人質の価値があるからこそ生かしていたのだ。その彼女は既に手に入れ、しかももう執着

も無くしてしまえば、ただの旅芸人の子供1人、王にとっては物の数にも入らない。

幼子は地下牢で1人、飢えの為に亡くなりそのまま捨て置かれたのだった。

「何事だ！」

「反乱か!？」

美珊が放った力は、王宮を半壊させた。

それは魔法では無く、ただの魔力。身の内に宿る尋常ならぬ膨大な魔力を、感情のままに圧縮させて放ったものだった。類稀な才能を持って生まれた彼女だからこそ出来た芸当である。

当然、それほどの威力に、宮殿内は騒然となった。

謀反か、反乱か、賊か、宣戦布告か・・・混乱した宮中では様々な憶測が飛び交う。

けれど実際のところは、それは1人の母の嘆きに過ぎなかった。

「~~~~~」

美珊は謳う。その腕に肉塊を抱いて。それは肉塊が生きた人間であつたころにお気に入りだつた民謡だつた。

「~~~~~」

誰がこの子を死なせたの？美珊は自問する。

それは私、と自答する。

私の子に産まれてしまったから、この子はこんな目に合ってしまった。

「~~~~~」

彼女の足は、後宮の裏庭の、その更に奥へと向かう。

そこはこの王宮で唯一、彼女が好きな場所だ。
生い茂る林にある、小さな小さな池。そこならば他の人間も来ず、
ゆっくりと出来た。

いつもならばその畔で1人座って水面を眺めているのだが、今夜
は違う。美珊は歩みを止めることなく池に身を沈めていく。

水は酷く暖かく感じた。ああそうか、始めからこうしていればよ
かったのだ。

死んでしまえば、全てが終わる。

死にたかったわけじゃない、そのように思ったことなど無かった。
やりたかったこともたくさんあったのに。

けど、もう、たくさんだ。

水中で呼吸はままならず、次第に遠のく意識の中、思う。

こんな王家^{もの}のせいだ。そうだ、そもそも王さえいなければ・・・。
滅べ、滅びてしまえ。

池には気泡が断続的に上がっていたがそれも次第に止み、後には
粛々とした月光と虫の声だけが残っていた。

彼女の遺体が発見されたのは、3日後のことである。

美珊は王の妃の1人として、黒曜君と号される。黒き髪、黒き瞳
の美姫であったという。

故に後世の歴史書ではこの夜の騒動を、『黒曜の乱心』と記され
る。

6 黒曜の乱心（後書き）

今回、難産でした。筆者の表現力不足というか、文章力不足というか・・・5歳児の腐乱死体なんて、嫌すぎます。でも、美珊の悲しみを引き立てるには丁度いいしで・・・。これでも、少し緩めた（つもり）です。

感想頂けると嬉しいです。

7 金の瞳

王宮が半壊の憂き目に遭って早3日。

幾人もの大工を呼んで始めた修復も軌道に乗り始めた中、玉座の間にある人物が居た。

「そうですか・・・裏庭の池で・・・」

今し方、上質な絹の官服に身を包んだ官吏にこの事件の犯人・・・即ち美珊の遺体が上がったと報告を受けているのは、国王・班保ではない。

本来彼のものであるはずの玉座に座っているのは、年嵩の品の良い女性。

班保の正妃・玉麗（まゆり）である。

ちなみに当の王はと言つと、本来なら玉麗が居るはずの後宮にいる。これは今に限つた事ではなく、もう30年以上続いていることだ。

現王は政を省みない。玉麗がいなければ、長い歴史を誇っていたこの琳悠国・朱王朝（シユ）も、とうに荒れてしまつていただろう。

「何と嘆かわしい・・・痛ましい・・・」

あの騒動の直後から、玉麗は迅速な捜査を始めていた。

そして、犯人が美珊であること、彼女が後宮に居た経緯などを知つた。

玉麗は、何も知らなかった。

2年前に王が旅芸人の娘を後宮に引き込んだこと、その娘が正式な側室となったこと、彼女が身籠つたことは、知ってはいた。

けれど、それはこれまでもしよつちゅうあつたことで、正直詳細までは気にしてなかったのだ。

気にしなかったことが、今になって悔やまれる。無知はいいわけにはならない。これが結果で、現実なのだ。

国王・班保とその正妃・玉麗が結婚したのは来暦^{らいれき}2070年。今から丁度40年前のことだ。

2人はそもそも従兄妹同士で、よくある政略結婚だった。当時から、放蕩者であつた班保としつかり者の玉麗は何所か相容れなかつた。多分、根本的な所でウマが合わなかつたのだらう。

班保が王位を継承したのはそれから6年後のことであつたが、やはりと言うか何と言うか、班保はすぐに政務に飽き、遊興に耽るようになった。

玉麗は始めこそそんな夫を諫めていたが彼は聞く耳を持たず、終いには業を煮やした玉麗自身が政務を行うようになった。それでもその頃はまだ期待していたのだ。妻がしゃしゃり出たとなれば、流石の班保も面白くはあるまい。そうしたら少しは考えを改めるのではないかと。

けれど結果はこの通り。玉麗が表の仕事を的確にこなすのいいことに、班保はますます遊んだ。

今となつては、既に玉麗は夫を見限っている。

玉麗が実際の政務を行う反面、班保は後宮を掌握していた。玉麗も、後宮のことにだけは口が出せない。

それでも年々増える一方の後宮維持費は次第に財政を圧迫してきており、近々メスを入れようかとも考えていたのだが、そこでこの事件だ。

真相を知つて湧き上がるのは夫への呆れと怒り、美珊とその息子への同情と哀れみだった。

けれども、済んでしまったことはどうしようもない。せめて、これから同じ過ちが起らないように努めよう。

そこまで考え、はたと気付いた。

「それで・・・黒曜君が産んだ王子はどうなつたのですか？」

その疑問に答えたのは、今さつき美珊の訃報を伝えに来た臣下だ。

「現在、こちらで保護しております。お会いになりますか？」
答えた男はまだ若いが、今この場にいる者たちの中でも特に姿勢が良く、鋭い目つきをしていた。

「・・・ええ、仁昇にしやう。案内を。」

は、と再び深く頭を下げた彼を、洛らく 仁昇という。まだ30そこそこで高官としてはかなり若い、飛び抜けた才と深い見識、そして優れた人格の持ち主であり、玉麗がかなり目を掛けていた。何でも『塔』で法学と政学、経済学を高いレベルで学び博士はくしの学位を持っているらしく、現在は法を取り仕切る法務所に詰めている。

今は急ぎの公務も無いし、来客の予定も無い。そう考えた玉麗は、美珊が産んだ王子とやらの様子を見に行くことにした。

美珊の息子は後宮ではなく、表の医務室にいた。

ある意味、そこはこの王宮内で最も安全な場所であろう。

すでに今回の騒動の原因が美珊であることは、知れ渡っている。
その息子への風当たりも、当然ある。

しかし医務室だけは、一種の治外法権を持つ。医務室に勤めるのは当然医者だが、医者は全員『塔』の民であり、その国の民では無いからだ。医者を害するようなことがあれば、その国は『塔』から医者を派遣してもらえなくなる。誰も己の首を絞めたくは無いため、医者に危害を加えようなどと考える者はそうそういない。

そして、母を亡くした赤子を医務室で預かってもらうというのは、何も不審な点はない。元が旅芸人の娘である美珊には後ろ盾など無かったのだから、その美珊が産んだ息子にも、後ろ盾など無い。進んで面倒を見ようなどという奇特な者はいない。

これでまだ、王子の王位継承順位が高ければ話は変わっただろうが、その子は第9王子だ。王位を継ぐことはまず有り得ない。つまり、恩を売りたいと思えるほどの価値を見出せないのだ。

「発見時は寝台から落ちていたらしくかなり衰弱していましたが、

今は元気なものですよ。」

医務室の白いシーツの上に横たえられた赤子の顔を覗き込み、玉麗はハツとして口元を押さえた。

開いたばかりの双眸、その光彩は金色だった。

「……おじいさま……」

ポツリ、と小さく呟く。彼女は、この赤子と同じ瞳を持つ者を、1人だけ知っていた。

「王妃？」

仁昇が訝しげに訊ねたが、玉麗は小さく首を振っただけであった。彼女の脳裏に浮かぶのは、彼女がまだ幼いころに崩御した祖父だった。唯一の孫娘だった玉麗を大層可愛がり、王族としての誇りや務めを教えてくれた存在。

琳悠国朱王朝第28代国主。厳格だが確実な治世を敷いた名君としてその名を今に伝えている。

玉麗の祖父ということは、この子の実父である班保の祖父でもあり、即ちこの子にとっては曾祖父に当たるのだから、似ていても可笑しいことはない。

けれど、今までにこの色を持って産まれた子は他に見なかった。朱王家の者は玉麗自身も含め、概ねが紅い眼を持って生まれるからだ。

今尚尊敬する祖父。その祖父と同じ特徴を持って産まれた赤子。玉麗は不思議な縁を感じた。

「……決めました。」

凜とした声音は、既に何かを決意していた。

「何を、ですか？」

仁昇は先を促した。

「この子の名を、です。」

「！？王妃、それは……」

それは即ち、彼女がこの赤子の名付け親になる、ということだ。それは彼女がこの子の後見人になる、と示すことでもある。

事の大きさに仁昇も驚くが、玉麗は揺るがなかった。

「勿論、だからといってこの子を権力争いに巻き込むつもりはありません。けれど・・・せめて、償いをしたいのです。この子の母とその夫、そして異父兄・・・何より、この子自身にも。」

哀れな子だ、と思う。

母は既に亡く、父は恐らくこの子を見ない。班保はそんな男だ。

「それとも、黒曜君はこの子に名を遺して逝ったのですか？」

それならば諦める、と玉麗は言外に告げた。ややあつて仁昇は答える。

「不明です。何分、出産直後から遺体発見まで、彼女と言葉を交わした者はありませんでしたので・・・書置きの類も見つかってはおりません。」

実際、美珊はこの子を名付けていない。彼女がこの子にしたことは、ただ2つ。産んだことと、寝台から突き落としたことだけだ。

「ならば」

玉麗はそつと赤子を抱き上げた。

彼女自身は、子を産んだことは無い。夫とは昔から不仲であったし、特に即位後はまともに顔を合わせた

ことすら数えるほどだ。念のために言っておくが、即位したのはあくまでも、玉麗ではなく班保のはずである。なのに何故、玉麗がこれほど多忙なのか甚だ理不尽ではあるが・・・まあ、今はそれを言っている場合では無い。とにかく、それでもその手つきは危なげがなかった。

「天耀、と。」

名は、既に決まっていた。それを聞いて、仁昇は目を見開く。

「天耀・・・で、ございますか？」

「ええ。天耀、と。」

それは、この国の民ならば誰もが知っている名であり・・・そこに込められた玉麗の思いを察し、仁昇は再び恭しく頭を下げた。

「しかと、承りました。早速、戸籍所に伝えて参ります。」

機敏な足取りで医務室を出て行った仁昇を見送り、玉麗は赤子に語りかけた。

「天耀。そなたは、そなたの父には似てはなりませんよ・・・？」
ゆらゆらと温かな腕で揺られる赤子は、やがて眠りに付いた。

朱しゆ 天耀てんよう。

それは、かつての名君、3代前の王と同じ名であった。

来暦2110年 琳悠国王班保が20子、第9王子天耀誕生。

7 金の瞳（後書き）

やっと主人公の名前が出せました。

この『宝玉列伝 〱 琳悠国史』の主人公は、この天耀です。現段階の彼を一言で表すとしたら、『みそつかす王子』って所ですかね。

尚、今回の話で出てきた『塔』については、後で詳しく出す予定です。

これで第0章は終わりです。前史と題したわりには長引きました。

ここで裏話を1つ。

実は主人公と言った天耀、ある意味昇格キャラです。

彼は元々、別の話で出てくる主要人物の1人でした。その別の話とは、『宝玉本記』。本当はこちらが本編でした。主人公も別の人です。

でも、色々と設定を考えている内に、思ってしまったのです。「あ、コイツの方が書きやすい」と・・・。

『宝玉列伝 〱 琳悠国史』とは、宝玉にまつわる列伝の内の1つ、琳悠国の物語、という意味です。それなのに、主人公は途中で国を出てしまうという設定だったりします（ネタバレですかね？）。摩訶不思議。

ちなみに、宝玉についても追々書いていくつもりです。

なのでその内、『宝玉本記』も書くかもです。その時は読んでやって下さい。

感想・評価などが頂けると嬉しいです。

創世の嚙

昔々のことでございます。

この世は混沌に満ちていました。

気候は荒れ狂い、魔物は跳梁跋扈し、魔力は暴走し、人心は乱れ、争いの種は尽きませんでした。

そんな中、ある日唐突に、9人の賢者が現れたのです。

彼らは考えました。

人心が乱れるならば、人々に教養を身に付けさせれば良い。

こうして、青島に学院が創られました。

魔物が暴れるならば、それを鎮圧する力を得られれば良い。

こうして、赤島に鍛練場が創られました。

魔力が暴走するならば、それを操る術を覚えさせれば良い。

こうして、黒島に魔法学校が創られました。

それでも傷を負い病に苦しむならば、それを癒せるようにすれば良い。

こうして、白島に医院が創られました。

これだけの施設を統括する存在が必要だ。

こうして、黄島に管制機関を創られました。

この5つの島を、『塔』と総称いたします。

これが、この世界の中心にある『塔』の始まりであります。

世界には4つの大陸がございます。
東の青大陸^{せいたいりく}、西の赤大陸^{せきたいりく}、南の白大陸^{はくたいりく}、北の黒大陸^{こくたいりく}。これらの大陸では天災が続きました。

見兼ねた9賢者は、ある宝具をお創りになられました。
それは後の世界では、『宝玉』と呼ばれております。

4つの大陸をそれぞれ半分し、それを更に1つの大国と3つの小国に分け、全世界で計8大国24小国の32国。1つの宝玉で1国を守るように、と。

9賢者の内1人は『塔』に残り、他の8人はそれぞれ世界に散りました。1人4つの宝玉を携えて。

彼らは各々が担当することとなった土地にそれぞれ赴き、宝玉を授けて行かれました。

宝玉を持つ者は、その『国』の『王』です。

宝玉は『誰か』が所有することによって輝きを放ち、土地を守って天災を退けます。

また、彼らは仰せられました。

《魔法とは人智を超えた力。正しく扱わねば身を滅ぼす。》

『塔』で正式に魔法使いと登録された者には、証が与えられます。この証を持たぬ者は、宝玉が輝かぬ国では魔法を使えず、魔法道具も使えなくなりました。

また不思議なのは、小国の宝玉は複数人が所有者となることが可能であるのに、大国の宝玉は個人でしか所有できぬことです。

故に、8大国^{たいこく}を8大王国^{だいおうこく}とも称します。

また、各地には生きる糧を残されました。

北より西、西より東、東より南にこそ多くの魔物が出没します。しかし、北より西、西より東、東より南にこそ豊かな実りが与え

られました。

そうして世界は創られ、今の形を成して行きました。

やがて、長い年月が経ち、賢者方もこの世を去られた後。

『ある事件』があつた年を元年として、今のこの『来暦』らいれきの世が始まったのでございます。

創世の嚙（後書き）

今回は、この世界の創世神話（？）です。出て来たのは全知全能の神などではなく、ただの人間（賢者）ですが。

ちよつとした、世界観の解説です。まだ解り辛いかも知れませんが、後は追々書いていけたらいいなと思います。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

1 玉座の王妃

「『ある事件』って、何？」

「この世界の者ならば誰でも幼少期に語り聞かさられる創世話。例に漏れずやはりそれを耳にした天耀てんやうは、語り手である守役けいみん、恵明けいみんに訊ねた。

「さあ、それはよくわかりません。」

それまで滑らかに語っていた彼女が苦笑と共に首を振ったので、彼は首を傾げた。

「どの歴史書にも、その詳細は記されておられませんし、口伝でも伝わっていません。そのため、誰も知らないのですよ。それ以前のこととは古文書に記されておりますのに、その件だけがばつさりと。」

「ふうん・・・でも、『けんじゃ』さまって、ばかだね。」

「まあ、何を仰るのですか？賢者とは、『賢き者』という意ですよ？」

「だって、『ほうぎよく』なんて、ばかばかしいよ。」

きよとんと、まるで当然のように彼は言ったので、恵明は言葉に詰まった。

「『ほうぎよく』が土地を守るからって、それを持つ人が王様になる必要なんてないんじゃない？今だって、『ほうぎよく』を持つ王様はオレの父だけど、本当に国をおさめてるのは玉麗様でしょ？それは、まさしく事実であった。」

来暦2114年。天耀は今日、4歳になった。

創世話は大体3〜4歳の頃に初めて聞かされる。そのため恵明はこの昔語りをした。彼女としてはちよつとした通過儀礼のようなものつもりだったのだが、まさか真つ向から反論されるとは思わなかった。

創世話は、神話ではなく史実である。何しろ大昔のことであるから、曖昧な部分も誇張されているであろう部分も当然あるだろうが、誰もが疑問を持つこと無く受け入れている筈だ。

けれど、天耀の言うこともまた事実であり、その体制しか見たことのない幼児に何と言えればいいものか、恵明は迷った。

天耀の実父・琳悠国現王班保は、あの黒曜の乱心後も、全く態度を改める様子は無く、今でも後宮で遊興の日々を過ごしている。玉麗があの後かなりきつく締め上げた（らしい）からか、美珊のような目に合う娘は出なくなつたが。

ちなみに現在天耀が住まうのは、後宮ではなく表の悠光殿^{ゆうこうだん}・・・本来なら王たる班保の住まいであり、そのため琳悠国王宮を別名『悠光宮』^{ゆうこうみやう}とも呼ぶ・・・である。当の班保はと言うと、本来なら玉麗の住まいである後宮の北殿^{ほくてん}・・・王の正妃の部屋だ・・・で過ごしている。何ともまあもう、いつそ天晴れなほどの夫婦逆転生活である。

あの事件の後、玉麗は天耀を手元に引き取り、自ら選定した守役・恵明を付けて育てさせた。

文字通り彼女は天耀の後見人となつたのだが、だからと言って彼を権力争いに巻き込むつもりはなく、出来るだけ伸び伸びと成長することを望んでいる。だからこそ、人柄・能力は優れているものの、特に後ろ盾などは持たない市井の出である恵明を守役に付けた。

玉麗の望み通り、天耀は実に伸びやかに、健やかに育っている。そしてまたこれも玉麗の願いが叶つたのか、彼は見目にしろ性格にしろ凡そ父には似てない子であつた。かといって玉麗は美珊を直接見たことはないのです、誰に似ているのかは判然とはしないが。

そしてこの、まだ何も知らないはずの幼子は、時々はつとすると、うなことを言うのだ。

今回もまた、それである。

「今まで、だれもそう思わなかつたの？」

「……………ええ、そうですね……多分。」
『王』とは『宝玉』の所有者。『宝玉』の所有者が『王』になる。いつの間に、逆転していたのだらう。『王』が『宝玉』の所有者になる、と。

当たり前のことすぎて、疑問にも思わなかった。

「どうしたのですか？」

唐突に姿を現したのは玉麗だった。

「王妃！」

「玉麗様！」

突然のことに恵明は慌てて跪き頭を下げ、天耀は嬉しそうに彼女に飛びついた。本来ならば側室の王子である天耀が王妃たる玉麗にこのように接するのは、大変な無礼である。しかし玉麗は天耀をそれこそ我が子のように接しているため、この方が彼女自身も喜ぶのだ。

「どうしたの、こんな昼間に。」

現在時刻は午後2時。いつもならば玉麗は公務に忙しいはずだ。

「今さっき、届いたものですからね……急ぎの用件もありませんでしたし、たまには良いでしょう？天耀、誕生日の贈り物です。貴方は読書が好きでしょう？」

言って玉麗が差し出したのは、一冊の本だった。開き、天耀は困惑する。

「玉麗様……これ、むずかしい……。」

それはごく普通の童話集であつたが、漢字も多く、まだ4歳になつたばかりの彼には難しかった。天耀は確かに本を読むのが好きだが、普段読むのはまだ字も簡単で絵が多いものばかりである。

しかしそれは玉麗も承知しており、柔らかく微笑みながら諭すように語り掛けた。

「ええ、そうでしょう。ですから、もっと学びなさい。いつか、そういった本も読めるように。」

そうしたら、読んで聞かせてくださいね、といたずらっぽく片目

を瞑った。そうしたお茶目な面を見せると、彼女は実年齢よりもずっと若く見えた。

天耀は頷き、ぎゅっと本を抱きしめる。今の彼には、その本はただ両手で抱えながらでしか持てなかった。

「それで、何の話をしていたのですか？」

言つて、玉麗は膝を折り、天耀と視線を合わせた。これも、本来ならば有り得ないことだ。

しかし、ここは玉麗の私的な場所であり、いるのは彼女自身と天耀、それに恵明だけだ。気にする必要はない。

ちなみに恵明は、既に礼は止めて茶の用意をしている。

天耀はしっかりと玉麗の目を見て、たどたどしくも訊ねた。

「あのね、玉麗様はどうして王様じゃないの？国をおさめてるのは玉麗様でしょう？」

「王は、貴方の父でもある朱 班保だからですよ。」

「でも、王様のおしごと、してないでしょ？オレ、しってるよ。」

天耀は、何も一室に押し込められているわけではない。王の噂は、宮中でいくらかでも耳に入る。

どこから仕入れてきたのだろう、と玉麗は苦笑した。

「それでも、彼が王なのですよ。私は王の仕事を代行に行うことは出来ても、王になることはできません。」

「どうして、なれないの？」

言われ、玉麗は胸の奥がツキリと、微かに痛んだ。

『玉麗が男であつたらなあ。私も安心して逝けたであろうに。』

かつて、この子と同じ瞳を持っていた祖父は、幼い玉麗を見てよく言っていた。あれはもう、何十年前のことであろうか。

琳悠国では、女は王になれない。そう定めたのは確か17代目の王で・・・秀基（せうき）といったか。もう14代も前の王の頃、400年ほど前のことだ。

若い頃は、祖父の言葉を思い出しては悩んだものだ。夫が政務を放り出して、その説得も諦めた頃は。自分が王となれば、とも考

えた。

けれど、今はそう思わない。

女王がいけないとは思わない。実際、隣大国である絢正国けんせいこくは代々女王が治めているが、その栄王朝えいは朱王朝よりも長く続いており、治安も安定している。

だが。

「天耀。土地が荒れて1番に困るのは、そこに暮らす民です。とりあえず『宝玉』に所有者があれば天災は減りますし、魔法道具も使えますから、王が余程の愚王で無い限り何とかなるものです。」

「ぐおっ?」

「愚かな王、という意味です。」

夫・班保のような・・・とは、仮にも彼の実子である天耀の前では口や態度に出さないが。

「そして、『宝玉』の所有者を途切れさせないためにも、王統を明確にするのは有効。」

だからこそ自分は、後宮も守ろうと思えるのだ。次代の王のためにも。

「その国にはその国の流儀があり、それを变えるのは大変なことです。・・・そして私には、それだけの器量は無い。」

「そんなのっ!」

「無いのです。本当に。」

夫を正道に戻せなかつた自分は、その器ではない。

本当にそれだけのことが出るなら、王の仕事と夫の更正、同時進行でやろうと考えられたはずだ。否、それぐらいでなければ、駄目なのだ。

けれど自分は王の仕事を選び、それでも夫はやる気を出さないと悟った時点で、彼を見捨てた。

国を思つてのことには違いない。それでも、それだけでは駄目なのだ。

王の仕事をこなす、それだけでは並の王だ。せいぜいが良い王、

か。

それまでの流儀を打ち壊し、吹き飛ばすには、並ではいけない。希代の名君、と呼ばれるほどでなければ。

天耀はまだ納得できないようだったが、それでいいと彼女は思う。まだこの子の未来みきは長いのだ。ゆつくりと、歩んでいけば良い。

「さあ、天耀。恵明が待っていますよ。お茶にしましょう。」

天耀も、玉麗の意思を何となくだが察した。彼女は、彼に自分で考えるように促したのだ。

天耀は、玉麗を尊敬していた。かつて彼女が祖父を敬っていたように。例え王が何をしていても、彼女がいれば安泰だと。

けれどそれはこの翌年、呆気なく崩れ去る。本を読むという約束も、果たせないまま終わることとなった。

来暦2115年 琳悠国王班保が正妃・玉麗、病没。享年61。

1 玉座の王妃（後書き）

今回は1話が長めです。プロローグですから、短い話数で収めたかったんです。

玉麗、もう退場です。

でも、彼女はかなり重要な人物です。何しろ、主人公に多大な影響を与えた人ですから。今後も回想などで出てくる機会は多いでしょう。

感想・評価などを頂けると嬉しいです。

1 傾く大国

玉麗を喪い、早々に朝は荒れた。それこそ、彼女を慕っていた官吏達が、その死を悼む暇も無く。

王本人が死んだというなら国中が喪に服す事態であっただろうが、玉麗はあくまでも王妃だ。すぐに公務は再開される。

代わりにこなしてくれる人物がいなくなり、流石に班保も後宮から出て来た。

しかし、それがまた悪かった。

班保は、自分がどんな仕事をすればいいのか、まるで解らなかったのだ。王位に約30年就いていても、玉座に居たことも執務室に詰めていたことも殆ど無かったからだ。それどころか、考えたことすらなかったのだらう。

自然、班保は傀儡の王となる。出された書類に判を押し、決められた人物と会う。会議に参加はするがそれを纏めることも意見を出すことも無い。だが、それだけならばまだ良かった。傀儡のままの方が、有益なことは出来なかった代わりに、有害なことも出来なかったのだから。

それに、朝には玉麗が登用した能吏が大勢居たからだ。置き土産と言ってもいい。玉麗の人事は見事で、能力的にも人格的にも問題なかった。当然、それを取り纏めていた玉麗が居なくなっただけで彼らの負担は増えたが、政が滞る、という程では無い。

だが班保は、その状態にすぐに飽いた。

そして、彼らを疎んじるようになる。班保にしてみれば、彼らが自分を・・・王を蔑ろにしているように感じたのだ。

それは半分は正しい。彼らは、班保に王として期待していなかったからだ。けれど別に、したくてしていたわけではない。班保にそれだけの器量が無かったのだから仕方が無いのだが、班保はそうは

思わなかった。

次第に彼は、官吏達を遠ざけるようになる。同時に、そこを付け込む奸臣が現れた。こういった者たちが上手いこと班保を煽て出世をしていくと、当たり前のように国は荒れた。当の班保も、圧政を行うばかり。

結果、玉麗の死から1年も経つ頃には朝は様変わりを果たしていた。民にとつてもそれは同じだ。税は上がり、夫役は増え、政策は人々を苦しめるばかり。

国民にとつてみれば、青天の霹靂としか言い様が無かった。玉麗が自ら政を行おうとも、それは公には王たる班保の功績になつていだからだ。何も知らない彼らには、それまで善政を布いていた名君が妻の死を切つ掛けに豹変した、そのようにしか見えなかった。

琳悠国を別名、赤紫^{せきしだいしよく}大国とも言う。赤紫地方の大国、という意味だ。『塔』から見て南東の方角を紫方^{しほう}と言い、更にそれが赤紫^{せきしちほう}地方・青紫^{せいしちほう}地方に分かれる。赤大陸の紫方にあるから赤紫地方、青大陸の紫方にあるから青紫地方、といった具合だ。1地方に1大国3小国があり、8大国はそれぞれの地方を別名として呼ばれるのだ。ちなみに、青紫^{せいしだいしよく}大国は宝雲^{ほううん}国と言う。

全大國中最も南東に位置する琳悠国は他のどこよりも実り豊かであるが、魔物も多く出没する分どちらかと言えば武断主義的で、質実剛健な文化を育みつつ強い国力を持つ、と言われてきた。

しかしその大国は、急速に傾いていったのだった。

1 傾く大国（後書き）

自分で書いておいてなんですが、班保は本当にダメ王です。無能を通り越してます。こういう人は、いずれ報いを受けるでしょう。

感想・評価などが頂けると嬉しいです。

2 馬小屋

「美味しいか？」

「・・・・・・・・・・」

「そうだろ？良い人参らしいからな。」

「・・・・・・・・・・」

「何だ、こっちの方がいいのか？」

そう言っていると天耀は、左手に持っていた別の人参を鼻面に差し出す。天耀が向かい合っていた白馬は、がぶりとそれに齧り付く。

天耀が1人話していたのは決して、独り言を繰り返すアヤシイ子だからというわけではない。言葉を扱わない馬に話し掛けていたからだ。馬は首を振ったり鼻を鳴らしたりしながらそれに応えている。

天耀も、そんな反応が何を表すのかは心得たものだ。

何しろ、この2年程そういった生活が続いているのだから。

玉麗の死後、天耀の暮らしも変わった。

天耀の実父・班保は、表に出て来た後もやはり9男に興味を示さなかったが、代わりに彼に目を付けた者達がいた。

班保の他の王子達・・・つまりは、天耀の異母兄たちだ。

彼らは総じて、天耀とは違って大なり小なり後ろ盾を持った妃達が産んだ子だ。天耀には他に11人の異母姉もいるが、彼女たちは後宮から出て来なかった。しかし兄達は父と共に後宮から出、外に遊びに出てくるようになったのだが・・・最初に感じたのが、天耀への苛立ちだった。

彼らは、末の弟が表で王妃・玉麗によって養育されていること、その子があの黒曜君が産んだ王子であることは知っていた。

と同時に、見下していた。下種腹よ、下位の王子よと会ったことも無い弟を蔑んでいたのだ。

だが、表に出てみると、その子が何と好意的に見られていることか。

確かに天耀には後ろ盾は何も無いが、玉麗を慕う多くの官達は彼に期待していた。

まだ幼いが、利発で朗らかな王子であると。

元々玉麗は出自よりも能力重視で官を選んでいたから、彼らにとって天耀の母が平民の出であることは問題では無く、逆に、いい年をして背景に胡坐を組んで碌な能力も持たない兄王子達こそ、呆れと軽蔑の目を見た。

これまで乳母日傘で育てられてきた彼らにとって、その扱いの差は我慢がならないものだったらしい。

けれども、班保がそうだった官達を次第に遠ざけ始めると、彼らは段々と鬱憤を晴らすようになっていった・・・天耀に八つ当たりをするようになっていったのだった。それも寄って集って、だ。

まず手始めに、恵明を天耀の守役から外した。流石に王宮そのものから追い出したりはしなかったため、今彼女はごく普通の侍女をやっている。

次に、それまで暮らしていた悠光殿を追い出し、何と馬小屋に追いやった。働かざる者食うべからず、とか言って、馬番に指名したのだ。

そうして2年。しかし、7歳になった天耀だが、そんなことはそれほど苦にしていなかった。

恵明は暇を見つけては度々様子を見に来てくれるし、他の馬番の者たちも天耀に優しく仕事を教えてくれた。馬・・・というか、動物も嫌いじゃなかったし、何より彼は、働くのが好きなタイプだった。もっと言うなら、下働きに混じって汗水流すことを屈辱とは感じないタイプだ。それが兄達との大きな違いだろう。

兄達は、それが面白いくない。

苛めて溜飲を下げるためにやっているのだから、もっと悔しがってくれなければ意味が無い。

そんな微妙な齟齬は、段々と軋轢を生んでいき・・・ある日、天
耀のそれまでの比較的穏やかだった日々をぶち壊す事件が起こった
のだった。

2 馬小屋（後書き）

今回は短めに、天耀の現状を。現段階では本人、割と呑気なモンですが。次回からは急転していきます。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0358z/>

宝玉列伝 ～琳悠国史～

2011年12月19日21時52分発行